

島根県立大学出雲キャンパス  
紀要 第14巻, 37-43, 2018

# 1年次看護学生が捉える『患者にとっての安楽なケア』 —演習前後の変化—

梶谷麻由子・平井 由佳・岡安 誠子・川瀬 淑子

## 概 要

1年次看護学生の『患者にとっての安楽なケア』についての認識と、演習後の変化を明らかにすることを目的とした。看護学科1年次生に対し、『患者にとっての安楽なケア』についての考えを演習前後のそれぞれに分けてレポートとし任意で提出してもらった。レポートを分析した結果、品詞別抽出語は「患者」「ケア」「看護」「安楽」が演習前後ともに頻出回数が多かった。共起ネットワーク分析では、演習前後ともに「患者」「ケア」を中心に「安楽」「看護」が大きなネットワークを結んでいた。演習後に新たに抽出された「安心」「配慮」などの語が大きなネットワークと結びつき、ネットワークどうしは複雑な結びつきとなっていた。

キーワード：看護学生, 安楽, 演習前後, KHCoder

## I. はじめに

「安楽」は、看護の基本原則として安全、自立、経済性、倫理などとともに看護技術の重要な要素である。安全が生命に危険がない、とその意味が比較的明確なのに対し、「安楽」は広く多面的な意味が含まれるために、理解することが難しい概念である。「安楽」について広辞苑(2008)では、「心身に苦痛がなく、楽々としていること」とされ、佐居は、看護師のインタビューを質的に分析し、「危険がないこと」「人間らしい生活・日常生活を過ごせること」「その人らしい」「気持ちよい、心地よい、楽、快適」「精神的・身体的に苦痛がない状態」「安楽な体位」「家族がつらいと思わないこと」と安楽を定義している(佐居, 2004)。さらに、日本看護科学学会の看護学を構成する重要な用語集(2011)では、「安全な環境のもとで、身体各部の位置関係に無理がなく、機能的に安定しており、精神的にも適度の緊張のもとに自然な活動が営まれている状

態」と定義され、Comfortが同じ意味内容をもつものとして位置づけられテキストの中でも紹介されている。

一方で、「安楽」は一般の人が使用してきた言葉ではなく、仏教用語として使われ、現在でも看護の中でこそ使われる用語だが、日常生活にはなじみがない用語である(江川, 2014)。

このように、「安楽」という用語は広く曖昧に定義され、看護を学び始めた1年次生にとって捉え方が多様となる概念だと考えられる。

看護学生を対象とした安楽に関する先行研究では、基礎教育の学習を通して患者を全人的(ホリスティック)に捉えることができいくこと、看護に関する授業や日常生活の体験を通して「安楽」について理解を深め発展させていくことが明らかとなっている(河田, 2008)。

A大学では、1年次後期に講義と演習を通して安楽についての学習を深める。1年次看護学生は病院等の臨地実習を体験しておらず、これから看護について理解を深めていく段階で、「安

楽」という日常ではなじみのない概念について講義を通してどのように捉え、続く演習に取り組むことで「安楽」の捉え方が変化していくのか。本研究は、1年次看護学生の教育的介入への示唆を得るため、学生が「安楽」についてどのように認識しているのか、演習を通してその認識が変化するのかを明らかにする。

## Ⅱ. 目 的

1年次看護学生が『患者にとっての安楽なケア』をどのように認識し、演習を体験することで認識がどのように変化するのかを明らかにする。

## Ⅲ. 演習の概要

### 1. 演習の位置づけ

1年次後期に開講される生活援助方法論Ⅱの単元の1つである「安楽確保と苦痛緩和の援助技術」の中で洗髪と部分浴(手浴・足浴)の演習を実施した。この演習の目的は、安楽確保と苦痛緩和の援助に関する基礎的知識と援助技術を学ぶこととし、演習の到達目標は、安楽確保と苦痛緩和の援助に関する援助技術を修得することとしている。

### 2. 演習の展開方法

学生は、「安楽確保と苦痛緩和の援助技術」に関する演習の前週までに「清潔・衣生活の援助」、「排泄の援助」、「食生活と栄養摂取の援助」に関する講義と演習、「安楽確保と苦痛緩和の援助」に関する基本的事項について講義を受けた(表1)。その後に洗髪、部分浴(手浴・足浴)の演習を別日に実施した(表2)。演習は2人ずつのペアで、看護師役・患者役を交代で3回ずつ体験した。

## Ⅳ. 研究方法

### 1. 対 象

生活援助方法論Ⅱを受講したA大学看護学科1年次生80名のうち研究協力への同意が得られた71名。

### 2. データ収集期間：2016年12月

### 3. データ収集方法

生活援助方法論Ⅱの単元の1つである「安楽確保と苦痛緩和の援助」に関する講義を行った後、リラクゼーション目的の洗髪、部分浴(手浴・足浴)に関する手順、ポイントと根拠などを自

表1 安楽確保と苦痛緩和の援助 講義内容(抜粋)

<p>1. 学習目標：ひとにとっての安楽と苦痛の意味、痛み発生のメカニズムを理解し、安楽確保・苦痛緩和のための基礎知識と援助技術を修得する。</p> <p>2. 学習内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとにとっての安楽とは</li> <li>・安楽の定義</li> <li>・安楽と看護技術</li> <li>・Comfortケア(ケアリング、ホリスティックケア、清潔ケアコミュニケーションなど)</li> <li>・ひとにとっての苦痛とは</li> <li>・痛みの神経学的分類</li> <li>・全人的な痛み(トータルペイン)</li> <li>・痛みのアセスメント</li> <li>・安楽を確保するための援助(身体的・精神的援助、リラクゼーションを促す援助など)</li> <li>・温電法・冷電法の目的と効果</li> </ul>
---

表2 安楽確保と苦痛緩和に関する演習内容

<p>1. 事前学習内容(演習時間外での個人ワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保清とリラクゼーション目的で洗髪を実施する際の手順、ポイントと根拠</li> <li>・リラクゼーション目的で手浴を実施する際の手順、ポイントと根拠</li> <li>・マッサージやタッチケア等の方法</li> <li>・リラクゼーション目的で足浴を実施する際の手順、ポイントと根拠</li> <li>・「患者にとっての安楽なケア」についてあなたの考え 演習前(演習前に記載)と演習後(演習後に記載)に分けて記載</li> </ul> <p>2. 演習当日の内容(洗髪と部分浴は別日に実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・演習オリエンテーション</li> <li>・技術の手順とポイント確認(事前学習の内容)</li> <li>・洗髪・部分浴(手浴・足浴)をそれぞれ実施(2人ずつのペア)</li> </ul>
---

己の課題学習として提示した。その際に、『患者にとっての安楽なケア』についての学生の考えを演習前と演習後のそれぞれに分けてレポートとして提出してもらった。提出されたレポートの内、『患者にとっての安楽なケア』の記述内容のみを分析データとした。

#### 4. 分析方法

研究使用に同意が得られたレポートをフリーのテキストマイニングソフトである KHCoder を用いて分析した。KHCoder はテキスト化されたデータを計量的に分析し、データの全体像の把握とデータから抽出される特徴的な語や、語同士の関連性を明らかにすることができるプログラムソフトウェアである(樋口;2014)。分析は、データの全体像をみるために、名詞やサ変動詞、形容詞、副詞といった品詞別に単語を抽出した。さらに抽出した語を、語句と語句のつながりを探るため、共起ネットワーク分析を行った。単語の抽出および共起ネットワーク分析は演習前後のそれぞれで行った。分析の際、出現数による語の取捨選択は最小出現数を5とした、描画する共起関係の選択においては描画数を60と設定した。

#### 5. 倫理的配慮

レポートの『患者にとっての安楽なケア』の記述内容のみを研究データとすることについて、

研究の目的と方法を文書と口頭で説明し、研究協力の可否の自由を保証した上で研究への協力を求めた。文書内に研究に「協力する・協力しない」のどちらかにチェックしてもらい、協力するにチェックがあることを確認することをもって同意を得られたこととみなした。研究協力の有無については成績には一切影響しないこと、研究結果の公表についても説明した。分析にあたり、匿名性を保持するために分析箇所(最終ページとした)には記名せずに提出してもらい、該当ページのみを複製した後、内容をパソコンで打ち直しデータ化した。データ化は教育者以外の者で実施し、個人の特定が出来ないように留意した。また、文書内に担当教員の連絡先を記載し研究に関する意見や質問がいつでもできるように配慮した。

## V. 結 果

### 1. 抽出語の頻出回数

提出されたレポートの総抽出語数は演習前では2407語、演習後で3708語であった。そのうち、頻出語(出現回数5回以上)は演習前18語、演習後25語であった。演習前の品詞別抽出語では、名詞が「患者(60語)」「ケア(48語)」「温度(14語)」「お湯(13語)」「自分(10語)」の順で、サ変動詞が「看護(13語)」「リラックス(10語)」, 形容動詞が「安楽(15語)」「大切(9語)」で、副

表3 レポートの品詞別抽出語

総抽出語数：2407 (演習前) 3708 (演習後)  
頻出語数： 18 (演習前) 25 (演習後)

	名詞		サ変名詞		形容動詞		副詞				
	演習前	演習後	演習前	演習後	演習前	演習後	演習前	演習後			
患者	60	91	看護	13	26	安楽	15	22	しっかり	5	13
ケア	48	59	リラックス	10	13	大切	9	9	きちんと		5
温度	14	10	確認	7	8	楽		7	とても		5
お湯	13	10	説明	6		不快		6			
自分	10	9	援助	5							
プライバシー	7	5	安心		12						
コミュニケーション	6	11	配慮		10						
身体	6	5	演習		6						
精神	6										
体位	6										
コンフォート		14									
気持ち		9									
姿勢		8									
好み		6									

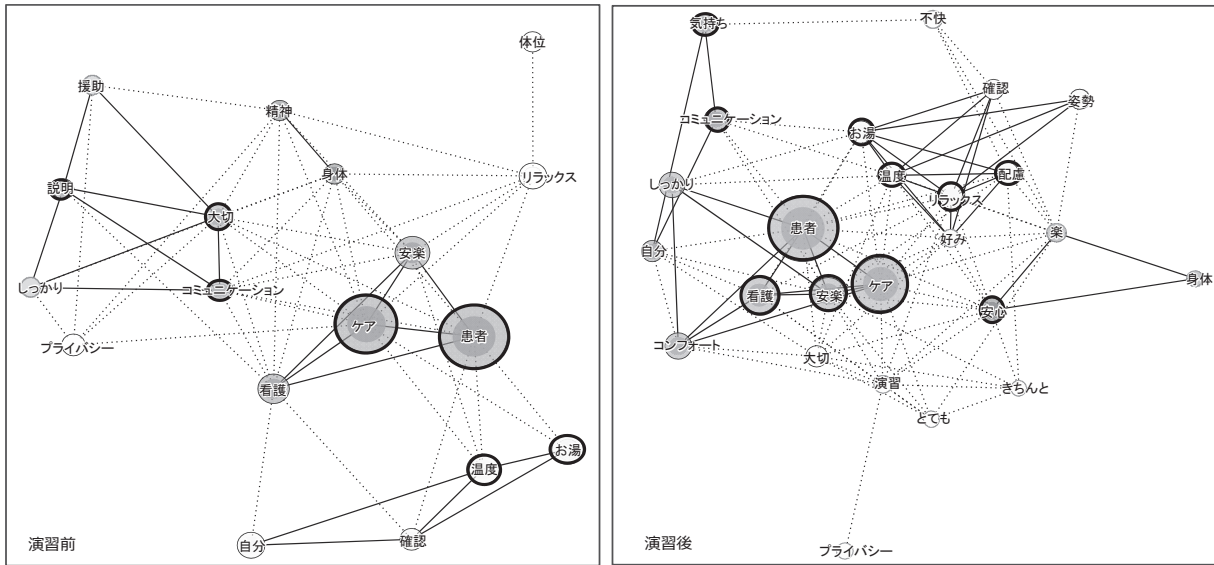


図 共起ネットワーク分析

詞が「しっかり (5 語)」で使用されていた。

演習後の品詞別抽出語では、名詞が「患者 (91 語)」「ケア (59 語)」「コンフォート (14 語)」「コミュニケーション (11 語)」「温度 (10 語)」「お湯 (10 語)」の順で、サ変動詞が「看護 (26 語)」「リラックス (13 語)」「安心 (12 語)」「配慮 (10 語)」, 形容動詞は「安楽 (22 語)」「大切 (9 語)」「楽 (7 語)」「不快 (6 語)」で、副詞が「しっかり (13 語)」「きちんと (5 語)」「とても (5 語)」が使用されていた。演習後に新たに抽出された品詞別抽出語は、名詞が「コンフォート」「気持ち」「姿勢」「好み」, サ変名詞は「安心」「配慮」「演習」, 形容動詞は「楽」「不快」, 副詞は「きちんと」「とても」の 11 語であった (表 3)。

## 2. 共起ネットワーク分析の結果

演習前のネットワークは 4 つのグループからなっていた。大きなネットワークとしては「患者」「ケア」を中心に「安楽」「看護」の語がネットワークを結び、「大切」「コミュニケーション」「説明」を中心に「しっかり」「援助」の語が、「お湯」「温度」を中心に「自分」「確認」の語が結ばれ大きなネットワークとなっていた。「身体」と「精神」は強いネットワークで結ばれ他の大きなネットワークにつながっていた。また、「リラックス」は「体位」と弱いつながりがあり、「プライバシー」も弱いつながりであるが、大きなネッ

トワークとつながっていた。

演習後のネットワークは 4 つのグループからなっていた。大きなネットワークとしては「患者」「ケア」「看護」「安楽」を中心に「コンフォート」「しっかり」の語がネットワークを結び、「リラックス」「お湯」「温度」「配慮」を中心に「確認」「好み」「姿勢」の語がネットワークを結んでいた。また、「コミュニケーション」「気持ち」を中心に「自分」の語が結ばれ「患者」「ケア」などを中心にした大きなネットワークとつながっていた。「安心」を中心に「楽」「身体」がネットワークを結び大きなネットワークそれぞれにつながっていた。また、「不快」「きちんと」「とても」は弱いつながりではあるが大きなネットワークと結びついていた。演習後の大きなネットワークどうしの結びつきは、演習前のものに比べ複雑な結びつきとなっていた (図)。

## VI. 考 察

1 年次看護学生が捉える『患者にとっての安楽なケア』のレポートから、総抽出語数と頻出語数をみると演習後は、演習前に比べその数が増えていた。品詞別抽出語では、「患者」「ケア」「看護」「安楽」は演習前後ともに全体の抽出語の中で特に頻出回数が多く、演習後にはその数も増えていた。学生は、演習で看護師役と患者

役双方の体験を通し、看護は患者にとって安楽なケアを提供することを実感したことで「患者」「ケア」「看護」の語が多く抽出されたと考えられる。また、演習後に新たに抽出された品詞別抽出語は、「安心」「配慮」「気持ち」などで、患者体験を通して感じた患者の気持ちに配慮しケアを提供することが患者に安心感を与え、安楽なケアにつながることを認識したと考える。河田ら(2008)の研究では、学生が「安楽」を考える上で、対象が自分自身の場合と他者である場合においては、その捉え方が異なっていたと報告している。病院等での臨地実習の経験がない時期の看護学生は、演習で看護師役と患者体験をすることで、今まで意識していなかった『患者にとっての安楽なケア』を自身の身体で感じ、講義や文献では得られなかった患者の思いに配慮することや看護者としての新たな学びを得ていたことが予測できる。

共起ネットワーク分析では演習前では「患者」「ケア」を中心に「安楽」「看護」がネットワークを結んでいた。また「大切」「コミュニケーション」「説明」を中心に「しっかり」「援助」が、「お湯」「温度」を中心に「自分」「確認」の語が結ばれそれぞれ大きなネットワークとなっていた。演習後の大きなネットワーク数は演習前と同様であったが、演習後に新たに抽出された「気持ち」「好み」「安心」「配慮」「楽」などの語が演習前の内容と近い大きなネットワークにつながることで、新たなネットワークとなっていた。さらに、演習後の大きなネットワークどうしの結びつきは、演習前のものに比べ複雑な結びつきとなっていた。1年次看護学生は、講義等で修得した看護技術を看護師役として単に遂行するだけでなく、患者役として実際に声をかけられ触れられるケアの体験をとおして、ケアされる側の気持ちを実際に肌で感じていた。このように看護師役・患者役の双方を体験することが、患者個々の好みや気持ちに細やかに配慮する『患者にとっての安楽なケア』につながっていくという認識の変化をもたらしたと考える。

西山(2016)は、看護師が看護を実践する際に『身体知』の獲得は欠かせないと述べている。『身体知』とは、患者を理解する際の看護師の「身

体が行う知的判断」,「身体から発信されるメッセージ」と説明している。また、菊池(2016)が行った調査では、看護学生は臨地実習での体験を振り返ることで、学生の知覚が変わり、変化した知覚が身体化し、その知覚が学生の理解を変えたことを報告し、知覚は看護職者らしさを支える「身体知」であると述べている。1年次看護学生は、病院等での臨地実習の経験がないうえに病気や患者としての体験が少ないため、患者をホリスティックに理解することや安楽なケアについてイメージする困難さがあることを懸念する。西山や菊池らという看護者らしさを支える『身体知』や看護学生としての豊かな感受性を醸成するためには、講義等で得た知識と身体的体験が統合できる演習を構築していくことが必要である。

## VII. 結 論

1年次看護学生の演習前後の『患者にとっての安楽なケア』の認識の変化について分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 品詞別抽出語は「患者」「ケア」「看護」「安楽」が演習前後ともに全体の中で特に頻出回数が多く、演習後にはその数も増えていた。
2. 共起ネットワーク分析では、演習前後ともに「患者」「ケア」を中心に「安楽」「看護」が大きなネットワークを結んでいた。演習後に新たに抽出された「気持ち」「好み」「安心」「配慮」「楽」などの語が新たなネットワークを結び、大きなネットワークどうしの結びつきは、演習前のものに比べ複雑な結びつきとなっていた。

なお、本研究は日本看護学教育学会 第27回 学術集会(宜野湾市)で発表したものに加筆・修正をしたものである。

## 文 献

- 江川 幸二(2014):クリティカルケア看護に活かす Comfort の概念と Comfort ケア, 日本クリティカルケア看護学会誌 10 (1), 1-10.  
樋口耕一(2014):社会調査のための計量テキスト

ト分析 内容分析の継承と発展を目指して,  
ナカニシヤ出版, 東京.

河田幸恵, 村中陽子 (2008) : 看護学生における  
「安楽」という概念の形成過程に関する研究  
- 1年次前期終了時の捉え方 -, 日本看護  
医療学会雑誌, 1, 27-36.

菊池麻由美 (2016) : 看護職者らしさを支える知  
覚 ある看護学生の「身体知」が変わると  
き, 看護教育, 57 (12), 964-969.

日本看護科学学会 (2011), 日本看護科学学会看  
護学学術用語検討委員会第9・10期編  
看護学を構成する重要な用語集, 2017-12-  
6, [http://jans.umin.ac.jp/iinkai/yougo/pdf/  
terms.pdf](http://jans.umin.ac.jp/iinkai/yougo/pdf/terms.pdf).

西山悦子 (2016) : 看護教育の危機の時代, 「身  
体知」, なぜ今, 「身体知」か, 看護教育, 57  
(12), 958-963.

佐居由美 (2004) : 看護実践場面における「安楽」  
という用語の意味するもの, 聖路加看護学  
会誌, 30, 1-9.

佐居由美 (2013) : 基礎看護技術以外の「基礎看  
護学」とは?, 看護教育, 54 (1), 18-24.

新村出編 (2008) : 広辞苑 (第6版), 岩波書店,  
東京.

**“Comfort Care for Patients” Grasped by First-year  
Students of Nursing Students  
—Changes Before and After Exercises—**

Mayuko KAJITANI, Yuka HIRAI, Masako OKAYASU,  
and Yoshiko KAWASE

Key Words and Phrases : Nursing student, Comfort, Before and after the  
exercise, KHCoder